

座主義演と醍醐寺金剛輪院の仏像

副島 弘道

はじめに

桃山時代から江戸初期にかけて、醍醐寺座主義演（一五五八〜一六二六）が行った寺の中興の事績はよく知られている。彼は、関白二条晴良の子で、將軍足利義昭の猶子となり、永祿十二年（一五六九）十二歳で上醍醐に上り、天正四年（一五七六）に醍醐寺座主、同十三年（一五八五）に准三后の位を受け、文祿三年（一五九四）には東寺長者をも兼ねた。醍醐寺は、九世紀後半に僧聖宝によって開かれて以来、各時代を通じて多くの堂舎が建立されたが、応仁の乱によって下醍醐のほとんどの建物は失われ、義演が座主についた当時は荒廃が進んでいた。

義演は、豊臣秀吉の寄進によって、慶長三年（一五九

八）に現存する下醍醐の五重塔の修理を完成させた。有名な秀吉の醍醐の花見は、この年の春のことである。同年八月に秀吉が没した後は、豊臣秀頼の援助を受けて、紀州湯浅満願寺の堂を移築して、慶長五年（一六〇〇）に下醍醐の現存する金堂が建ち、慶長十一年には下醍醐の西大門にあたる現存する二王門が建立された。この間、慶長十年（一六〇五）に上醍醐の主要な堂である如意輪堂、五大堂、御影堂が焼失したが、翌十一年に三堂とも再建された。

このように、今日見られる醍醐寺の伽藍の多くは、義演の努力によって再興された。このうち、金堂の仏像や西大門の二王像については、これまでも考察や紹介がある。ところで、義演は、多くの堂宇とともに、醍醐寺一山の寺務の中心となる下醍醐金剛輪院（現在の三宝院）の再興にも心をくだいた。金剛輪院は、義演自身の住む場所でもあ

つたから、そこに置かれる仏像や道具類には、ほかの堂塔の場合にもまして、義演の意向が強く働いた。ここでは、従来、紹介されることが少なかった義演再興の金剛輪院の仏像と道具などの制作についてまとめ、それらを通じて、桃山時代における仏像の造立や、古仏の修理に対する意識の一端を考察したい。

一 弥勒菩薩像の移安、
修理と護摩堂の荘厳

義演が再興した金剛輪院は、醍醐寺の北西角に位置し、今日この金剛輪院の後身である建造物群や庭園は、三宝院の名で呼ばれている(図1)。もともと、三宝院は平安時代後期に、現在の二王門の北東に建てられた醍醐寺内の院家の名で、現在の三宝院の建つ醍醐寺北西角の場所には、南北朝時代ころから代々の座主が住房としていた院家である金剛輪院があった。後に紹介する義演時代の道具類には、ときおり三宝院の名が記されることがあり、義演の時代にも、再興された金剛輪院を三宝院と呼ぶことがあったらしい。しかし、義

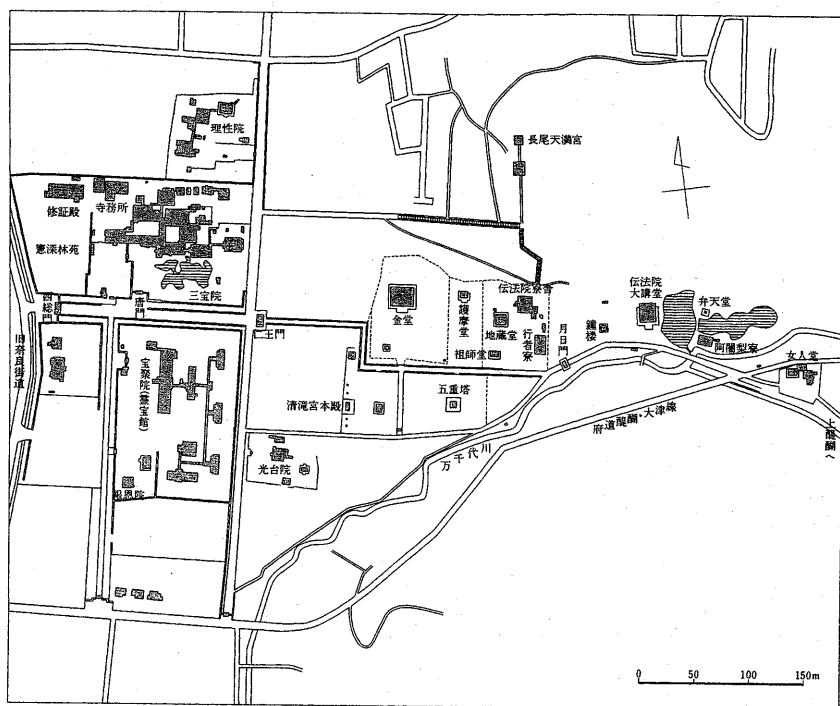


図1 現在の醍醐伽藍図 藤井恵介氏「醍醐寺—山上・山下の伽藍と歴史」(注1参照)から引用。

演は自分の日記には、この建物を終始「金剛輪院」の名で記しているから、本稿では、金剛輪院の名で統一して記述をすすめることにする。

若くして上醍醐の光台院に入った義演は、天正三年（一五七五）に下山し、金剛輪院をある程度整えて、ここに住んだらしい（『先途次第』）。そして、慶長三年（一五九八）になると、豊田秀吉の援助を受けて、寺の本格的な再興を始めた。藤井恵介氏の論考を中心として、義演の日記である『義演准后日記』に記された経過をたどれば、同年十二月二十四日には、金剛輪院灌頂堂と護摩堂がほぼ建ち、翌四年五月十四日に護摩堂が道場として利用され始めた。

慶長四年（一五九九）五月二十一日に、義演は金剛輪院護摩堂に、同じ醍醐寺内にある代々の座主の墓所としての役割をもっていた菩提寺から、弥勒菩薩像を移した。これが現在、醍醐寺三宝院護摩堂（弥勒堂とも呼ぶ）に現存する建久三年（一一九二）の銘を持つ、醍醐寺座主勝賢発願、仏師快慶作の木造弥勒菩薩坐像である（後掲図6）。この像は、おそらく後白河上皇の追善供養のために座主勝賢が発願して、彼の住房だったらしい上醍醐の岳東院に置かれたものだったが、いつの時代にか、菩提寺に移されていた。鎌倉時代の代表的仏師の一人である仏師快慶の数多い現存遺品のなかでも、彼の前半期のはつらつとした作風を代表

する仏像である。弥勒菩薩像が金剛輪院に移された時には、護摩堂の仏壇などは未完成で、像は仮壇に安置された（『義演准后日記』以下、とくに示すもの以外はこれによる）。

義演は、まず護摩堂に置く大壇と脇机および礼盤と灯台四本を作らせ始めた。慶長四年（一五九九）六月五日に、護摩堂の方五尺一寸の花形壇が作られ始め、六月十三日におおよそができ、二十四日に壇の一方の花形ができ、二十七日に花形壇と脇机、礼盤、磬台が、七月二日に花形のもう一方ができ、四日に灯台を蓮華形に作る事が決まり、十二日に四本の灯台が一応完成した。

八月八日に、義演は花形壇に打つ飾り金具を銀子二枚余の費用で作ることを命じ、九月十三日に金物ができ、二十日に花形壇以下が大体できた。十一月一日に花形壇以下の上塗りが行われて、十二日に花形壇の灯台四本の金物ができた。年がかわって、翌慶長五年（一六〇〇）四月七日に花形壇の上塗りができ、八日に花形壇側面の牙形（格狭間）に仏師が金薄を押し始め、十一日に牙形に絵が描かれ始めて、十三日に絵が完成し、飾り金具が打たれた。こうして四月十五日に花形壇はことごとく完成し、十七日に供養のために、醍醐寺内にある清瀧宮拜殿に運ばれた。そして、四月二十日には護摩堂に弥勒菩薩像が安置され、花形壇以

下が荘厳された。七月十七日に、護摩堂を道場として印可が行われたが、新調の花形壇であるために、壇敷を敷かなかったという。

この時作られた花形壇、つまり密教修法のための大壇は、現在、下醍醐の金堂に現存していることが、平成十三年八月の調査で確認された。高さ三七センチ、幅、奥とも一五・六センチで、義演のいう方五尺一寸に相当し、周囲に仰蓮と反花をあらわし、各側面には牙形、すなわち格狭間を五ヶ所ずつあらわして、その中に金箔を地として牡丹を描き、壇の四隅と框に蓮華唐草を彫った金銅製飾り金具が打たれる。天板裏に次のような銘がある(図2・3)。

醍醐寺 三宝院

脇机 牙形在金物 一脚

礼盤 牙形在金物 一脚

磬台 在金物 一 慶長四家記

日 准三宮法務(花押) 年月

燈台 花形在金物 四本

以上皆具新調訖不可出他所矣
准三宮義演

*墨書。ただし傍線部はそれぞれ横棧部に陰刻、墨入り。
また、大壇とともにこの時作られた灯台四本のうち二本



図2 大壇(現金堂) 醍醐寺

も、現在弥勒菩薩像が本尊として安置されている三宝院護摩堂に現存している。高さ九五・四センチ、および九六・三センチ、木造、漆塗りで、柱部の上下に、大壇の金具とほぼ同意匠の蓮華唐草文を彫った金銅製飾り金具を打ち、

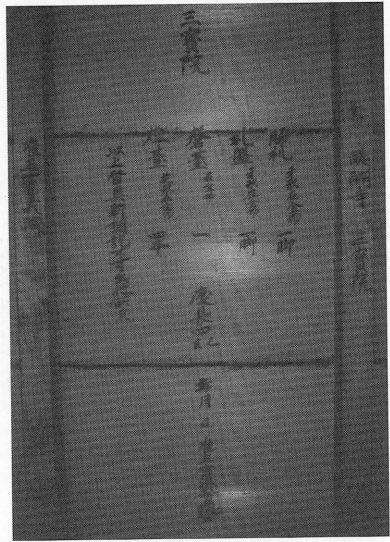


図3 同前 天板裏墨書

基台部は反花形にあらわす。二本とも、基台の底部に次の陰刻銘がある(図4・5)。

慶長四年^{癸巳}年作之

三宝院

准三宮(花押)

花形壇燈台四本内

これらの銘から、現存する作品が、義演が慶長四年(一五九九)に作らせた金剛輪院護摩堂の花形壇と灯台であることは間違いない。それにしても、この大壇などの制作に関する義演の記述は詳細をきわめていいる。

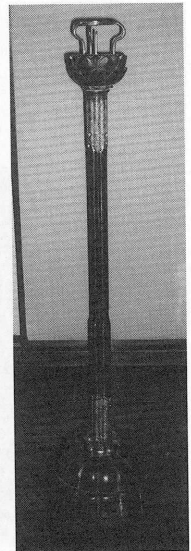


図4 灯台
(現三宝院護堂)
醍醐寺



図5 同前 基台裏陰刻

室内の大壇などは、このようにして整備されたが、弥勒菩薩像の光背の修理と台座の新造は、それからかなりの間をおいて始められた。

寛永二年(一六二五)二月一日に、仏師大口が弥勒菩薩像の光背に付ける化仏を作り、塗師、すなわち漆職人がこの化仏を塗った。二月五日にも光背の修理が行われ、二月

八日に塗師が弥勒菩薩像の台座を塗り終わった。二月九日には、台座はことごとく修理されて、黒漆を塗り金箔を押しす手はずであることが記される。二月十四日に塗師が再び

台座を塗った。おそらく、金箔の下地となる黒漆塗りが進められたのであろう。寛永三年三月十九日には金箔を作る打士が来寺し、金箔三三二〇枚を受け取った。この金箔の

枚数には、当時、台座と平行して作られていた、木造の両界曼荼羅仏台（後述）に使う金箔も含まれている。

現在、三宝院護摩堂に安置される木造弥勒菩薩像の本体は、鎌倉時代に仏師快慶が造った当初のままのものだが（図6）、光背に付けられた九体の化仏のうち、向かって右方の上から一、二、三番目と、左方の上から一、二番目のものは、作風が残りの鎌倉時代の化仏とは異なり、義演が記すように、この五体がおそらく仏師大口によって補作されたものである（図7・9）⁴。

現在の弥勒菩薩像の台座は、木造漆箔で、蓮華の下に敷布



図6 木造弥勒菩薩坐像（現三宝院護摩堂）建久3年（1192）
快慶作 醍醐寺

子、反花をあらわし、上框の下にうづくまつた獅子をあらわし、中框、下框を備えた、高さ一〇一センチを越す大きなもので、蓮弁の一枚ずつや框に、螺鈿を多用した豪華な装飾が施される(図10・11)。寛永二年に、その仕上げ塗りや金箔押しが行われているから、制作はその前年頃に開始されたのであろう。

寛永二年九月二十七日の日記に、義演は、「弥勒菩薩像

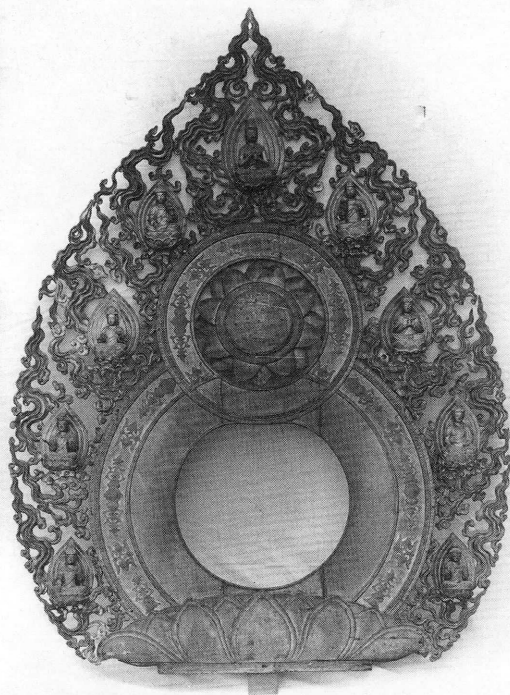


図7 同前 光背

の本尊と光背は古いものだが、光仏(光背の化仏)のうち四、五体は今回新造し、また、台座は当初のものではなかったもので、今回、漆を塗り、青貝(螺鈿)を入れて、金箔を押し」と、記した。現存する弥勒菩薩像の光背化仏の補作と台座の新造は、この頃までにすべて完成したのであ



図9 同前 化仏
寛永2年(1625)か

図8 同前 化仏
建久3年(1192)

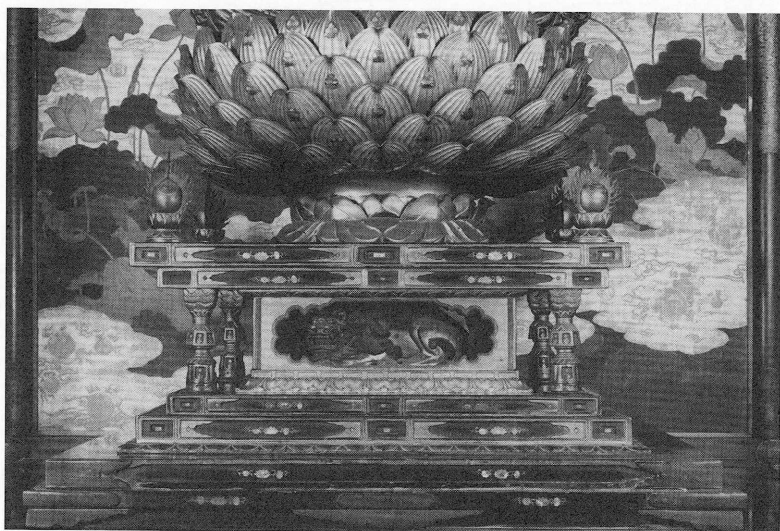


图10 同前 台座 寛永2年(1625)

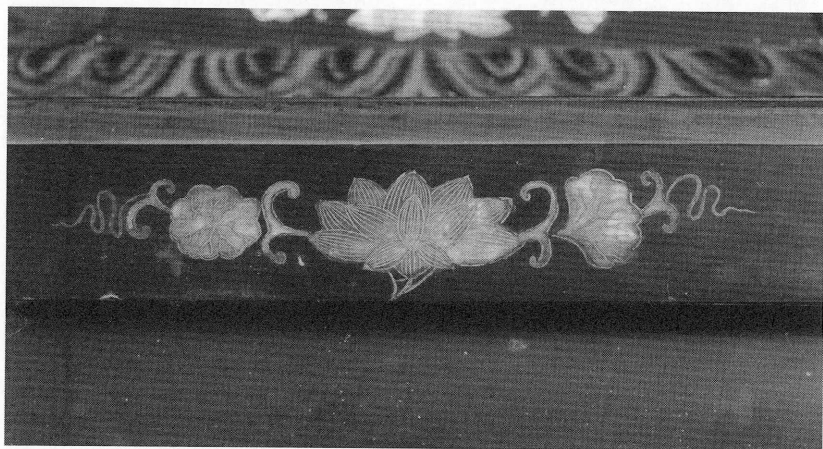


图11 同前 台座 部分

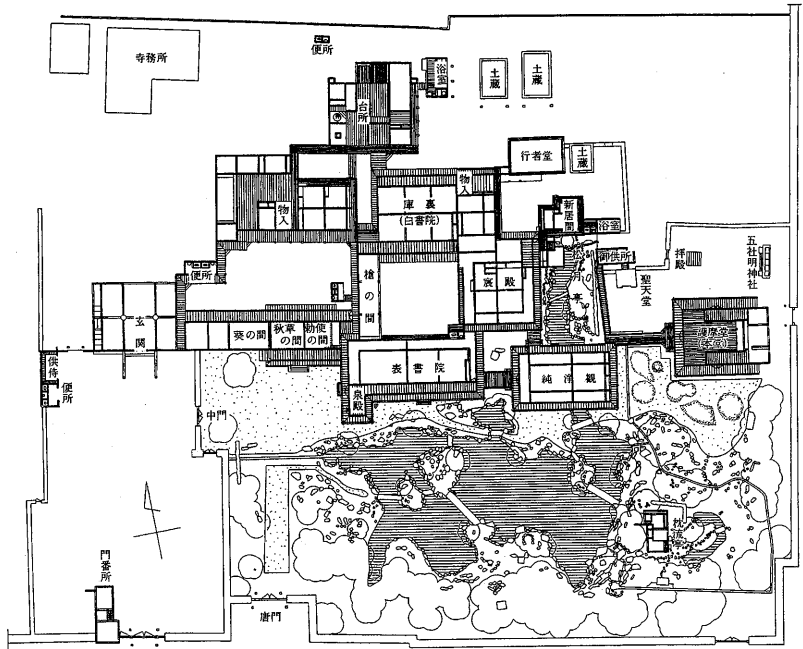


図 12 現在の三宝院平面図 藤井恵介氏「醍醐寺—山上・山下の伽藍と歴史」(注1参照) から引用。

義演によって、この時作られた弥勒菩薩像の見事な台座は、意匠と技術の両面にわたって、この時代の仏像の荘嚴具として最高水準にあることが認められる。そこには、義演の弥勒菩薩像の荘嚴に対する強い熱意が示されている。

なお、現在の三宝院の護摩堂は、義演が復興した金剛輪院の護摩堂そのものではない。義演の時代の護摩堂を、明和七年(一七七〇)から安永二年(一七七三)頃にかけて、やや北東の方角に移築し、さらに拡張して一回り大きな建として建てられたものが、現在の護摩堂であることが、内陣天井墨書などによって確かめられている。(図12)。

二 不動明王像の修理と両界曼荼羅仏台の制作など

弥勒菩薩像のほかに、義演は、もと上醍醐普門院にあったと伝えられる不動明王像を、再興した金剛輪院に慶長三年(一五九八)十二月五日に移した。この不動明王像はひどく朽損していたために、慶長四年(一五九九)四月十三日



図13 木造不動明王坐像（現旧伝法学院）醍醐寺

に、仏師が修復のために来寺し、十四日に像を洗った。表面の古い彩色が除かれたのであろう。二十七日には、像にはめる玉眼が新調され、七月二十一日に、完成した不動明王像が開眼されて、七日間の護摩が行われた。この時、不動明王像は金剛輪院内の常御所に置かれた。

慶長六年（一六〇一）の義演の日記などからわかるように、この不動明王像は、毎月一日から三日まで義演自身が修した豊臣秀頼のための七座の不動護摩の本尊として用い

られた。慶長三年八月に豊臣秀吉が没し、彼の援助に多くを負っていた醍醐寺の復興工事は、一時、中断された。しかし、秀吉を継いだ幼少の豊臣秀頼（一五九三〜一六一五）の助力を得て、工事はまもなく再開された。義演は、当時の醍醐寺の大壇越である秀頼の誕生日である八月三日にちなんで、毎月一日から三日まで、金剛輪院で秀頼のために不動供を修することを恒例としていた。

寺と義演にとって大切な意味を持つこの不動明王像は、現在、醍醐寺内に建つ旧伝法学院（真言宗醍醐派の僧侶養成所、近年、新伝法学院が寺内のほかの場所に完成し、現在は利用されていない）に、現存している（図13）。像高八二・五センチ、木造、古色仕上げ、玉眼の像で、両目を開き、上歯をあらわした不動明王坐像である。像には慶長四年に修理された部分が多く、両腕と表面の仕上げなどは後補で、玉眼は通常とは異なり、表面から貼付けられている。胴体などにはうかがえる当初の造形の特徴を見れば、おそらく、平安時代十二世紀の作品であろう。ところで、この像には木造、漆箔、一部漆塗りの光背と台座が付属していて、その台座に次のような銘がある（図14・15）。

（台座天板表墨書）

此不動明王者、根本上醍醐普門院本尊、異于他畫像也、

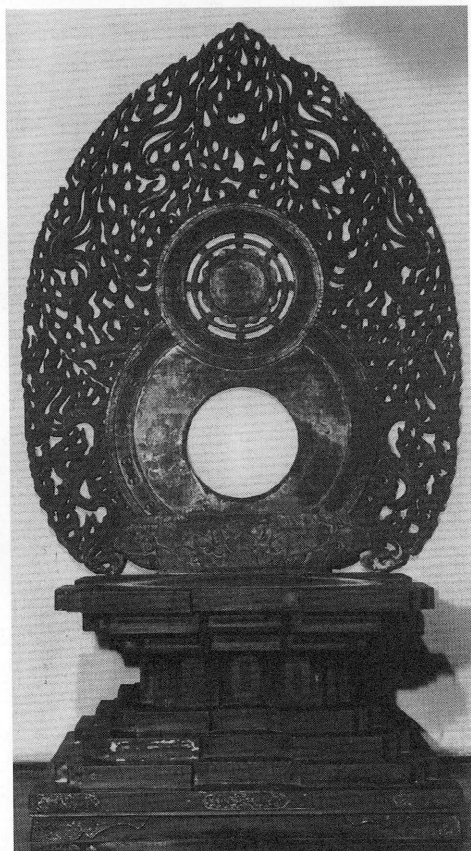


図 14 同前 光背および台座

法務演

彼院退転之後、纔ニ結草堂安置、是仍雨露頻濕既覃、尊躰破裂苒苒空鎖、忽全座光朽損、依之先年奉渡金剛輪院護摩堂、如形修理、今□□而課大仏師康正法印、瑟瑟座并後光悉新造之、努力々、雖為暫時、去当院勿渡他所矣、

時慶長十一歲_{辛酉} 十一月 日座主

准三宮(花押) _{辛酉年 四十九}

(台座天板裏横棧部墨書)

下醍醐寺金剛輪院護摩堂 慶長十一年_{辛酉} 十一月 日

た瑟瑟座には、さすがに丁寧な技巧が認められる。銘文に豊臣秀頼の名は見えないが、彼は、慶長十年四月には右大臣の地位に昇っていた。醍醐寺の最大の保護者である秀頼のための修法の本尊である不動明王像を、義演がこの頃にあらためて荘厳したのには、それ相当の理由があったのであろう。

慶長十一年(一六〇六)当時、醍醐寺では再建された西大門に安置するために、平安時代後期の長承三年(一一三三)に造られた旧南大門の二王像の修理が行われていた。

この銘によれば、不動明王像は金剛輪院の護摩堂に置かれ、一度修理されたが、慶長十一年(一六〇六)十一月に、失われていた光背と台座が新たに作られたことが知られる。その担当仏師は、七条中仏所の正系で、当時の造仏界の最有力仏師である東寺大仏師職の法印康正だった。今、現存する像の光背と台座を見ると、周縁部にこまかい火焰が透彫りされた光背や、重厚な隅金具を付け

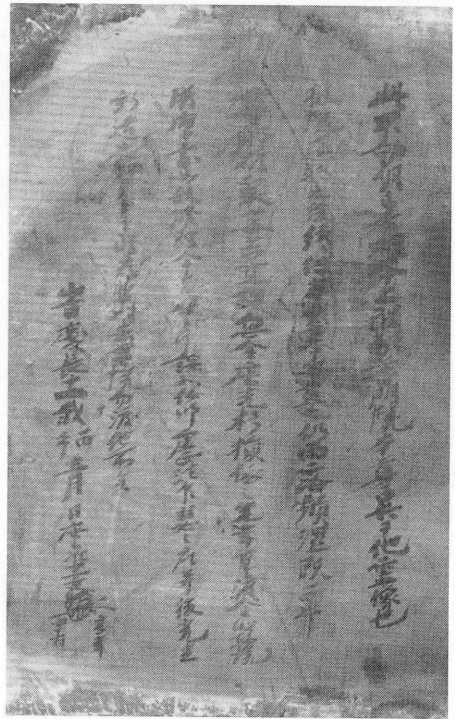


図15 同前 台座天板表墨書

送っている。

寛永二年（一六二五）の弥勒菩薩像の光背修理や台座新造と平行して、義演は、「両界蓮台」という名の道具を作らせ始めた。

寛永二年二月一日、弥勒菩薩像光背の化仏の制作が始まった日に、番匠、すなわち製材や木工を業とする職人が、両界蓮台の下地を作り始めた。二月五日にその下地のおおよそができ、八日に漆が塗り始められた。下地とは、この場合は木造工事を指すのであろう。十四日に仏師兩人が両界蓮台の蓮座を刻み、八月二十九日に「両界曼荼羅蓮座」などに貝が入れられた。すなわち螺鈿による裝飾が施された。九月二十七日に「両界曼荼羅蓮座」の漆塗りがおおかた完成した。

同年五月に京都に運ばれた二王像は、修理を終えて八月十日に西大門に置かれた。修理仏師は、法印康正である。義演は真言宗の高僧として、京都東寺の長者も兼ねていた。そのために、現在も東寺金堂にその偉容を示す康正作本尊薬師三尊像の造り始めの儀式である御衣木加持は、慶長七年（一六〇二）十月十六日に、義演の住む醍醐寺金剛輪院で行われた。義演が、不動明王像の光背と台座の新造に、康正を起用できた背景には、このような関係があった。不動明王像の光背、台座が完成して間もなく、十二月二十二日に、義演は大仏師調進の礼として、銀三枚と小袖などを

この「両界蓮台」という耳慣れない名の道具は、平成九年八月の調査によつて、現在の三宝院護摩堂（弥勒堂）の須弥壇上に置かれている、衝立形の黒漆塗りの板に、長方形の蓮華座と天蓋形の屋根を備えた、二基一組の木造漆箔の一種の仏台であることがわかった。本尊の快慶作弥勒菩薩坐像の左右には、現在江戸時代作の木造弘法大師坐像と理源大師坐像が安置されているが、その両像の背後に置かれたこの衝立形の仏台（二基とも高さ約一二七センチ、幅

一一八センチ、奥五〇センチ）は、螺鈿の意匠などに弥勒菩薩像の台座と共通点が多いために、同時代のものであることが予想されていたが、調査時に、ホゾでゆるく留められている台と板、および天蓋を外すと、その矧面などに次のような墨書銘が発見された（図16（18））。

（胎藏界仏台、向かって右方、弘法大師像の後方に安置）

（受座上面） 胎藏界、前、寛永二乙丑年十一月五日、

此両界新造矣、法務（花押）書之、後

（反花内側） 前、胎藏界、後、

（反花底板） 胎藏界、

（格狭間内側） 胎藏界、前、

（衝立ホゾ） 胎藏界、前、胎藏界、前

（金剛界仏台、向かって左方、理源大師像の後方に安置）

（受座上面） 金剛界、前、時寛永乙丑年十一月五日、

両界新造畢、准三后（花押）、後、三寶院、

（反花内側） 金剛界、前、

（格狭間内側） 金剛界、前、

（衝立ホゾ） 金剛界、前、金剛界、前、

（蓮華下板前） せして

（蓮華下板後） はじめのう

銘が明らかにするように、これが義演が作らせた両界曼荼羅用の蓮台である。銘に何カ所かあらわれる「前」「後」の文字は、各部分を繋ぐ際に、その向きを指示する語である。二基の仏台は同形同大で、蓮華座の蓮弁と反花に螺鈿で宝珠を、また、框には螺鈿と金蒔絵で蓮の意匠をあらわし、下框には蓮華唐草文を彫った金銅製金具を打つ。また、格狭間の中に配されたそれぞれ違う姿勢をとる木造獅子などのすぐれたできばえに見られるように、細部まできわめて丁寧な細工が施される。

以前、この作品を初めて紹介した際には、「板に何かをはめたような痕跡がないが、銘文などからは、胎藏界、金剛界の曼荼羅を貼るか、はめるかして荘嚴するための台付きの額のようなものであろう」と推測したが、それは寛永二年九月二十七日条の義演の日記を見落としていたための誤りであった。義演は、仏台の用途について次のように記している。

一、両界万タラ蓮華座取合コクソニテ堅ム、漆ヌリ大形出来、金薄ハ惣ヲカタメテ後可押支度也、事外サウサ也、金台両界ハ板ヲ漆ニテカタメ本尊ヲ蒔絵ニテ可図用意也、如此板ニ書付タルハ未見及為興隆仏法

仰付畢、伝聞安祥寺ニ昔木像ノ両界在之由也、灌頂堂建立出来セバ是非共木像ニ諸尊作テ板ニトチツケテ未来ノ様ニト念願不淺、

その意味は「両界曼荼羅蓮華座は、木屎漆で堅め、漆塗りがほぼ完成した。金箔は漆塗りがすべて終わってから押す予定だ。意外に大変な作業だ。金剛界、胎藏界の諸尊は、板を漆地で固めて、その上に蒔絵で描く予定だ。このよう

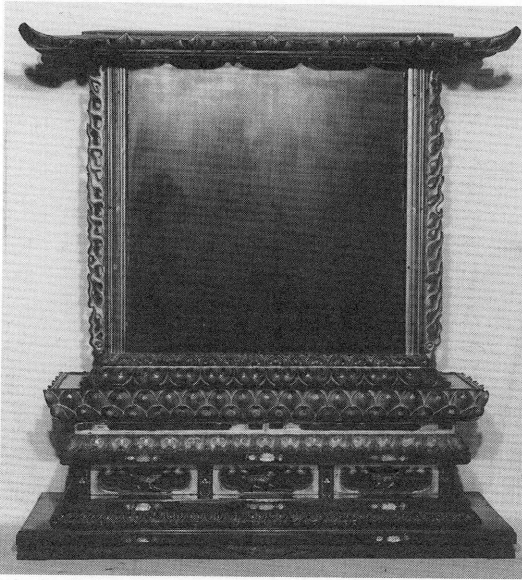


図 16 仏台（金剛界） 寛永2年（1625） 醍醐寺

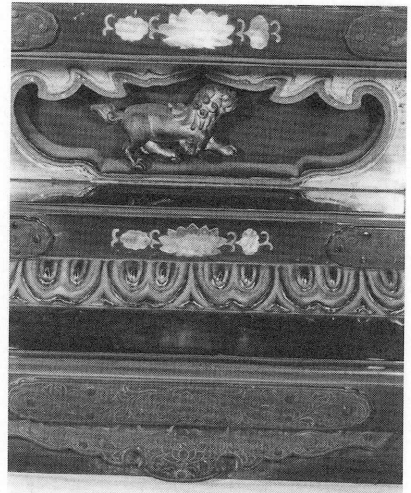


図 17 同前 部分



図 18 同前 受座上面墨書

な、板に蒔絵で描いた曼荼羅は見たことがないが、仏法興隆の為にあえて指示した。聞くとところによれば、安祥寺（京都山科の真言宗寺院）に、昔、木像の両界曼荼羅があ

つたという。灌頂堂が完成した時には、そのような、木造の諸尊を板に付けた曼荼羅を作りたいものだという深い念願をもっている」ということである。黒漆を塗った衝立形の板に、義演は蒔絵で両界曼荼羅を描かせようと考えていた。しかし、現在の板には、蒔絵の痕跡は認められない。

この記事以後、日記には、仏台に關して、寛永三年（一六二六）三月十九日に、打士兩人が来寺し、仏台と弥勒菩薩台座分の金薄などを受け取ったことだけが記される。それから間もなく、寛永三年（一六二六）閏四月二十一日、醍醐寺の復興に力を注いだ義演は、六十九歳で没した。蒔絵は、彼の生前に施されることなく、没後も黒漆塗りのままの状態におかれて、今日にいたつたのであろう。なお、ここに記された灌頂堂は、慶長三年に護摩堂とともに柱が立てられた金剛輪院の灌頂堂ではなく、義演があらたに建てようとしていた灌頂院の堂のことかもしれない。

三 金剛輪院護摩堂と古仏の転用、再生

ここまで見たように、座主義演は、菩提寺の弥勒菩薩像や旧普門院の不動明王像のように、目立たない場所に置かれていた寺内の古い時代の仏像を、金剛輪院に移し、豪華な台座を補作したり、大幅な修理を加えて面目を一新させ

た。また、彼自身も見たことがないという、新奇な蒔絵両界曼荼羅を作らせようとした。

義演は、金剛輪院の建物の工事について、毎日のようにその普請の具合を日記に記した。また、寺内の桜などの木の移植についても、こまかい指示をたびたび出した。そこには、建築工事や作庭に対する強い関心がうかがえるが、同様に、義演は、仏像の修理や荘嚴についても、相当の興味があつたらしい。金剛輪院の再興に際して、彼はここで見た仏像などのほかに、いろいろな仏像、道具の新造や修理を行つている。

慶長五年（一六〇〇）六月十四日に、上醍醐の光台院から小塔二基を取り寄せ、これをもとにして、和州番匠に命じて、金剛輪院護摩堂に安置するための小塔を作らせた。翌六年五月三日に、三尺の小塔の漆塗りが終わった。五月六日の日記には「小塔自身コクソカイ了」と記されていて、どうやら義演は、みずから木屎漆を塗ることも体験したらしい。慶長九年（一六〇四）十月二十五日に、京都から薄屋二人を召して小塔に金箔を押し、彩色は絵所に行わせた。

また、慶長六年（一六〇一）八月一日から、義演は、同年七月に没した自分の伯母である智光院（二條尹房女）のために寺内で阿弥陀供を行ったが、その時に用いられた本尊は「阿弥陀仏作」の阿弥陀三尊像だった。慶長十一年（一六〇六）

十一月二十四日に、この阿弥陀三尊像が修理されたが、その時の日記には「安阿弥作」と記されている。すなわち、安阿弥陀仏快慶作とみなされた阿弥陀三尊像が当時の寺にはあつたらしいが、現在、それに直接該当する仏像は存在していない。

義演は、寛永二年（一六二五）三月二十日から、長四尺五寸の木造愛染明王像を作らせ始めた。八月二十一日に番匠が光背を作り、八月二十九日に、仏師二人が像の新造を行ったが、十一月十二日には、まだ制作途中で、完成に關する記事は知られない。愛染明王を本尊とする愛染法は、義演がおりにふれて修法や行事作法の手本とした、室町時代の醍醐寺座主満濟の頃にも、醍醐寺では恒例とされていた修法で、義演も盛んにこの修法を行った。このほか、寛永二年の日記には、不動三尊像、釈迦三尊像、地藏菩薩像の古仏をどこからか求めて、それを修理させようとしたことも記されている。

義演が次々におこなった仏像などの新造や修理は、いったいどのような意図にもとづいていたのだろうか。その一端は、幸いなことに、彼が没する前年にあたる寛永二年（一六二五）九月二十七日、すなわち、兩界曼荼羅仏台の制作や弥勒菩薩像の修理のようすを記した条から、知るこゝとができる。

一 弥勒勝賢僧正發起阿安弥作山上覚洞院本尊也、中興

菩提寺建堂安置畢、覚洞院炎上ノ後菩提寺ニ安置スル
敷、蓮華大座ハ新見畢、今度漆ニテ塗青貝ヲ入、惣金
薄ヲ押畢、本尊ト後光トハ昔ノ也、光仏モ四五躰新造、
此弥勒中尊本尊トシテ愛染不動二尊ヲ脇士可安用意也、
兩界ハ弥勒ノ左右ニ可安耳、

* 「阿安弥」は安阿弥の誤記か。安阿弥陀仏快慶のこゝとであらう。

すなわち義演は、快慶作の弥勒菩薩像を修理して、金剛輪院護摩堂の本尊に迎え、修理した旧普門院不動明王像と、新造の愛染明王像をその脇侍像とし安置し、さらに、蒔絵兩界曼荼羅仏台を、弥勒菩薩像の左右に置こうと考えていたのである。もちろん、新たに作られた大壇以下、灯台などの道具は、この護摩堂に置くためのものだった。義演の計画がこのようなものであったこと知るとき、そこにはいくつかの興味深い事柄が指摘できる。

その一つは、義演の古仏に対する強い関心である。快慶作の弥勒菩薩像を利用する態度には、由緒あるすぐれた仏像を、台座や化仏を補って再度荘厳し、金剛輪院の本尊にしようとする意図が顕著にうかがえる。また、旧普門院不

動明王像の場合には、おそらく見るに堪えないほど破損していた像を、ほとんど新造に近い大修理を行つて、それを修法の本尊に利用しようとした。快慶作と伝える阿弥陀三尊像の修理などに関しても、同様の意図がうかがえる。

義演の古仏や建物に対する知識と興味が相当のものだったことは、慶長六年二月に奈良の古寺を歴訪した際の日記にも示される。東大寺南大門では、「柱已下ノ躰、末世難及事也、二王ノ勢難尽筆」と、門と二王像のありさまに深く感動し、法隆寺五重塔の塑像群を見たおりには、「羅漢以下驚目、悉土仏也、四方ニ葬送ノ躰ナトモ在之、巖ノ中ニアリ」と、見所を正確に指摘している。法隆寺の次に訪れた法輪寺では、「塔一基、堂二字相残了、其ツクリ法隆寺ノコトシ、瓦ノツクリ異様也、柱ノ躰又異様ナリ、何モ非当時ノ作、上古也」と、現代の美術愛好家もかなわない注意深い観察の結果を述べている。

もう一つの特徴は、義演が、教義や經典に従つた尊像の組み合わせには必ずしもこだわらずに、当時の自分の目的にそつて、諸尊を護摩堂に配置しようとしたことである。醍醐寺座主であり、東寺の長者を兼務した義演は、真言宗の僧侶として当時最高の地位にあつた。その住房である金剛輪院の護摩堂本尊に弥勒菩薩像を選んだことに、教義あるいは信仰上の強い必然性はなかつたはずである。義演は

弥勒菩薩像の由緒と優れたできばえに注目して、この像を本尊に迎えたのであろう。その脇に置く不動明王像は、当時の醍醐寺の大檀越である豊臣秀頼のための修法の本尊として、古仏が修理された。愛染明王像もまた、義演が恒例として行つた修法の本尊として新造された。義演は、古仏の価値や利用上の便宜にもとづいて、三尊の組合せを選んだのである。両界曼荼羅は真言宗の教義の根幹となる尊像である。義演は、それさえも通常の絹や紙に描かれた曼荼羅とは異なる、板に蒔絵で描き天蓋と蓮台を備えた過去に例のない曼荼羅を考案した。金剛輪院護摩堂の堂内は、義演によつて演出、工夫された、創意にあふれる場であつた。ところで、義演の日記には、彼がこの新しい形の仏台のヒントをどこから得たのかを、おぼろげながら示唆する記事がある。慶長八年（一六〇三）四月十三日に、義演は上醍醐の光台院を訪ねたが、その帰りに、経藏にあつた円光院両界曼荼羅を見て「無類也、仍新造ノ心催了」と記した。義演が見た円光院の両界曼荼羅とは、今日、醍醐寺に現存する板に金銅の薄板を張り、その上に梵字種子を彫つた金属の円板を取り付けた、それぞれ縦一〇七センチ、横九一センチ前後の二面一具の珍しい形の種子曼荼羅（重文）のことであろう（図19）。平安時代末の醍醐寺の様子を記した『醍醐雜事記』巻一によれば、円光院は応徳二年（一〇

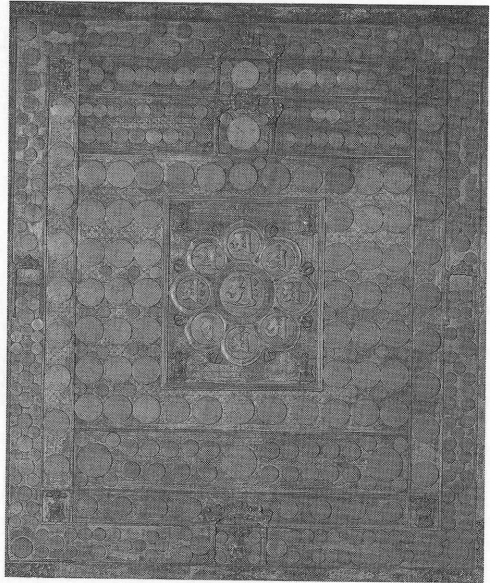


図19 金銅両界曼茶羅 (胎藏界) 醍醐寺

薄れていただろうが、この体験は蒔絵両界曼茶羅の制作と何かしらの関係があったのだろう。

このことに象徴されるように、古い時代の仏像や道具類に深く興味を持ち、それらに触発されるとともに自身の創意をも働かせて、義演は金剛輪院内の諸尊を整えていった。彼が、当時、寺内にある文書や聖教類を博搜して、自ら『醍醐寺新要録』と名付けた寺誌をまとめたことはよく知られている¹³。今日、醍醐寺に伝わる膨大の数の文書類は、義演の収集、分類と保管にかけた熱意の結果である。また、豊臣秀吉によって建てられた壮麗な伏見城が落城した後、義演はそこに残った建物を、醍醐寺の御影堂として移建することを考えて、寺の者を視察に行かせたことがある（慶長六年三月二十三日条）。この計画は実現しなかったが、現在の醍醐寺金堂は紀州から移建された建物であり、復興された金剛輪院の各堂舎も、建築史の研究によって、主として他所から既成の建物を移築して進められたことが知られている¹⁴。

八五)の草創で、本尊は「金銅両界曼茶羅」だった。義演の時代に、円光院はすでに存在しなかったが、曼茶羅は上醍醐の経蔵に納められていたのであろう。もともと、最近の工芸史研究者の説では、現存する金銅両界曼茶羅は、作風や意匠の特色から鎌倉時代の制作かと考えられている¹²。ともかく、義演がこの金銅製の曼茶羅を見たことは間違いない。彼が蒔絵の両界曼茶羅仏台を作らせようとしたのは、円光院の曼茶羅を見た二〇年以上後のことである。記憶は

義演の古仏、道具、文書や建造物などに対する強い関心と、活発な修理や制作活動には、その時代に伝わった歴史的な遺産を正しく評価し、現実的な用途にそって効果的に利用しようという態度が、終始うかがえる。現在のことはでいえば、それは文化財に対する研究、保存活動であり、

その積極的な活用である。

義演に見られるこのような興味と情熱は、しかし、必ずしも彼一人の特殊な性癖としてだけ理解されるものではない。信長、秀吉が出て、国内が統一に向かう情勢のなかで、桃山時代には、それまでやや沈滞した状況だった仏像制作の場でも、文禄五年（一五九六）完成の京都方広寺大仏や、慶長九年（一六〇四）頃完成の京都東寺金堂薬師三尊像の復興に見られるように、活気ある状況が生まれていた。醍醐寺座主義演の活動に端的に示された歴史遺産の再生と活用への熱意は、当時の造像界、ひいては造形文化全体の潮流を理解するための、一つの重要な視点となるように思われる。

注（敬称略）

1 藤井恵介「醍醐寺―山上・山下の伽藍と歴史」（大橋治三・藤井恵介・前田常作『日本名建築写真選集』九 醍醐寺 一九九二年 新潮社）。

藤井恵介「三宝院の建築」（『醍醐寺大観』三巻 醍醐寺三

二〇〇一年 岩波書店）。

2 副島弘道「醍醐寺三宝院本堂（弥勒堂）の弥勒菩薩像」（『醍醐春秋』二二 一九九三年 真言宗醍醐派宗務本庁）。

3 『義演准后日記』慶長九年末までの分は、『史料纂集』に永貞三、鈴木茂男、酒井信彦、副島種経の校訂によって公刊さ

れている。

『義演准后日記』第一、第二、第三（一九七六年、一九八四年、一九八五年 続群書類従完成会）。

慶長十年以後の未公刊部分は醍醐寺所蔵義演自筆本によった。

4 （注2）前掲論文では、弥勒菩薩像の光背は中世のある時期の後補と考えたが、その後、再三の調査によって、光背のほとんどは造立当初のものであることを確認した。

5 村田健一「三宝院護摩堂」（『醍醐寺大観』三巻、醍醐寺三二〇〇一年 岩波書店）。

6 副島弘道「醍醐寺彫刻所在確認調査について」（『美学・美術史学科報』二二 一九九四年 跡見学園女子大学美学美術史学科）。

益田佳苗「醍醐寺大講堂の不動明王像と脇侍二童子像」（『美学・美術史学科報』二三 一九九五年 跡見学園女子大学美学美術史学科）。

7 副島弘道「仏台」（西川新次・有賀祥隆監修『祈りと美の伝承 醍醐寺展』（特別展図録）一九九八年 日本経済新聞社）。

8 コクノは木屎。木粉などを漆に混ぜたもので、仏像表面の修整や、漆工品の合わせ目や割れ目を埋めるのに用いる。「すみずみまでも木屎かうて、水ももらさぬ仲と契り・」（『浮世草子』傾城禁短気』正徳元年（一七一）との例が、中田祝夫他編『古語大辞典』（一九八三年 小学館）に示されていて、「コクソカウ」は、木屎を塗るという意味であろう。なお、現在の護摩堂の大壇に置かれる木造宝塔（高一〇〇・〇センチ）には慶長九年の銘があり、義演発願のものにあたる可能性があ

る。

- 9 寛永二年（一六二五）九月二十七日の義演の日記に、愛染明王像は二尺四寸と記される。愛染明王像は坐像としてあらわされるのが普通である。像高二尺四寸の坐像を立像に換算して、四尺五寸と表記したのであろう。このように坐像を立像に換算して記すことは、史料にしばしば例がある。
 - 10 現存する運慶等作の国宝木造金剛力士立像のことである。
 - 11 現存する法隆寺五重塔の国宝塔本四面具のことである。「羅漢」は北面の釈迦涅槃像を囲んで号泣する僧形像を、「葬送ノ躰」は西面の釈迦の金棺と舍利容器をあらわした情景を指す。
 - 12 原田一敏「金銅両界曼荼羅」（東京国立博物館他編『国宝醍醐寺展』〈特別展図録〉二〇〇一年 日本経済新聞社）。
 - 関根俊一「金銅両界曼荼羅」（有賀祥隆監修 総本山醍醐寺他編『世界遺産 醍醐寺展』〈特別展図録〉二〇〇一年 日本経済新聞社）。
 - 13 醍醐寺文化財研究所編『醍醐寺新要録』上・下（一九九一年法蔵館）、として公刊されている。
 - 14 （注1）藤井恵介「三宝院の建築」。
- （付記）本稿は跡見学園女子大学平成十二年度国内留学（留学先、日本女子大学文学部）による研究成果の一部である。関係諸氏の御援助、および醍醐寺ご当局の御高配に深く感謝申し上げます。